



# わいるどらいふ

No. 2

特定非営利活動法人  
宮崎野生動物研究会  
2005年10月1日

## アカウミガメ上陸産卵結果 2005年

本年度のアカウミガメの上陸・産卵調査も無事終了しました。この調査は宮崎市青島地区から高鍋町堀の内地区の海岸において、昭和50年（1975）から30年間毎年継続されてきました。

本年度の調査報告（8月20日現在集計数）によると、調査区全体で上陸回数は1135回（産卵回数763回、戻り回数372回）となり、ここ数年来の高い数値を記録した昨年数（上陸回数1246、産卵回数803、戻り回数443）より若干減少しました。このうち、上陸回数ではこどものくに（99回）と運動公園（89回）において過去最高値を記録し、堀の内、新富海岸でも昨年度に続き高い上陸回数を示しました。しかし、その他の調査区においては減少となりました。

本年度の調査では、ここ数年来の砂浜減少とそれに伴う海岸修復工事がアカウミガメの上陸期間中に調査区内で実施されたこともあり、上陸回数の大幅な低下が懸念されました。また昨年同様、台風上陸による産卵巣への影響も心配されました。

これらの記録については現在当研究会で分析中です。結果につきましては10月10日に開催される「2005年度アカウミガメ上陸調査報告会」において調査区毎に報告されます。

事務局長 児玉純一



### 御崎馬（ミサキウマ） *Equus caballus*

宮崎県南部の都井岬に生息する日本在来馬。高鍋藩が1697年に軍馬や農耕馬の牧を開いたのが始まりとされます。一般に野生馬と呼ばれますが、粗放な管理下で自由放牧されて再野生化した馬群です。肩高約130cm、体重は250kg前後、日本の馬では木曾馬などと同じく大型品種です。採食は1日に18時間以上で、夜も休むことなく食べ続けます。立ったまま休息することが多く、まどろみの状態で30分程度しか続けて休みません。繁殖期の春にはシバ草地でハーレム群を形成し

ますが、冬には群を解散して森林内を主な生息地とします。アジア馬の原始的形質が品種改良されずに残っており、行動学的にも遺伝子資源としても貴重で、国の天然記念物に指定されています。

## 2005年 ウミガメ調査海岸のようす

本研究会の一番北にあるウミガメ調査地は高鍋町の堀の内海岸(約 2.3 km)で、宮田川と永谷川に挟まれた区域です。防潮林の海側には草が密に生える浜堤があり、なだらかな砂の斜面が波打ち際まで続いています。昨年(2004)の8月末の台風で1mほどの段差ができ、これに突き当たって産卵しないで海に帰ってしまうウミガメが今年は多数見られました。この浜にはグンバイヒルガオがたくさん生育していますが、今年はそれを覆うようにネナシカズラが繁茂しました。(石井正敏、河野敏明)

その南の新富町・富田浜(約 3 km)は、永谷川から一ツ瀬川まで調査を行なっています。ここも目だった砂の浸食は見られません。南半分には垂直護岸がありますが、昨年の台風前までは護岸の高さまで砂がついて斜面になっていました。台風後は砂が流出して護岸がむき出しになっていますが、今年ウミガメが産んだ卵塊の上にはすでに数十cmの砂がつき、孵化調査のために砂を掘っても深くても卵に手がとどかないほどです。(山本繁幸)

一ツ瀬川から大淀川までは、大炊田、明神山、住吉、一ツ葉海岸と続きます。佐土原町の**大炊田海岸**(約 2.3 km)は、砂浜が大きく削られています。全体的に砂浜が狭くなってきているようで、安全な場所への卵の移植が多くなってきています。石崎川までの1.5 km～1.8 kmで護岸工事が行なわれていました。**明神山海岸**(約 2.8 km)には、護岸工事のためにアカウミガメがまったく上陸できない区間が約 1 km ありました。波打ち際は波よけの鉄板が立ちふさがり砂浜がなく、まったく上陸・産卵できませんでした。調査中は工事現場の陸側を歩いて通りましたが、7月中旬からは夜通しで工事が進められ、大型トラックが大きなテトラポッドを積んで行き来していました。工事現場以外は、例年のように上陸・産卵がみられました。一部ではイヌまたはキツネによると思われる卵の

食害もみられました。昨年は台風の影響で海岸が大きく削られましたが、今年は産卵・孵化期間中に台風が上陸することもなく、砂が少し戻った感じがします。**住吉海岸**(約 0.7 km)は、宮崎市立フェニックス自然動物園から南へ 700 m です。そこから更に南は**一ツ葉海岸**(約 4.0 km)へ続きますが、傾斜護岸に波が打ち寄せ、産卵する砂浜がありません。(西 明美)

大淀川から南の3海岸では、週2回ウミガメ調査をおこないました。いずれの海岸も昨年の台風によって海岸線が荒れており、上陸数への影響が懸念されました。清武川までの**松崎海岸**(約 4.0 km)は、昨年の台風で海岸が分断されていました。例年通り護岸域での産卵は少なく、相当な距離を迷走して海に戻る個体も多くみられました。清武川と加江田川の間**の運動公園海岸**(約 2.0 km)でも昨年の台風の爪痕は大きく、崩壊し放置された車道の残骸に挟って衰弱したウミガメを救出しました。清武川河口右岸に広く砂が付いており、ここに上陸・産卵が集中しています。道路崩壊と垂直護岸の区域には、戻り個体が多いようでした。海岸の南北2箇所に設けた移植地点の卵は、安定した天候のせいかな順調に孵化しており、孵化率は例年以上に良好です。最南に位置する**こどもの国海岸**(約 1.0 km)では、護岸工事が5月の産卵期に入っても完了せず、工事用鉄板に挟まり脱出できないカメを救出したこともありました。7月以降、加江田川河口付近で何か所もの掘り返しが見られ、盗掘が疑われました。8月の台風では、護岸いっぱいまで波が押し寄せ、浜が全て水没していました。いたる所で実施されていた護岸工事では、概ね関係者の方々の協力が得られ、保護活動にはその地域にかかわる人々の理解を得ることが大きな推進力になることを実感しました。(古田琴、越本知大)



段差が出来た堀の内海岸 (2005.8.7)



傾斜護岸の工事が進む明神山海岸 (2005.8.3)

## アカウミガメの生態

### <子ガメ誕生>

アカウミガメ（以下カメ）が、長い時間をかけて産卵した卵は、太陽熱と地熱によってあたためられ、成長します。産卵された卵は、約60日かけて子ガメへと成長していきますが、5～6月のまだ涼しい時期に産卵された卵は70～80日で孵化し、7～8月の暑い時期に産卵された卵は40～50日で孵化します。産卵場所の砂が乾燥しすぎていたり、濃い塩分を含んでいたりすると、卵は水分を失い、発生した胚は死んでしまいます。また、産卵場所が常に波をかぶるような場所であると、卵が海水につかったままになり、呼吸ができずに死んでしまいます。

産卵されたばかりの卵には、将来子ガメになる胚がまだ形成されていませんが、産卵後2～3日で、卵の上部に胚が形成されます。ニワトリなどの鳥類の卵と違い、カメの卵には黄身を支えるカラザがありません。そのため卵の上部に形成された胚は、卵が回転すると卵の下部や側部になるため死んでしまいます。私たちは産卵場所が海水につかったり、波に浸食されるような場所である時には、保護のために卵を移植しています。この時に、胚が形成されている場合には、卵の上下がずれないようにして卵を移動させています。

ところでカメのオスとメスはどうやって決まるとお思いますか？実は性の決定には、子ガメが卵の中で成長する時の温度が関係しています。性が決定する時期の温度が28℃以下であれば全ての子ガメはオス、30℃以上であれば全てがメス、29℃ではオスとメス両方が生まれてきます。オスとメスが決定する時期は、胚発生が、20～30%進んだ時点と考えられています。温度によって性が決定するのは、アカウミガメだけの特徴ではなく、他のカメやワニなどでも見られる現象であることがわかっています。

いよいよ、子ガメ達が巣穴から這い出る時期が— 3 —



来ました。しかし、子ガメは先に生まれた順に巣穴の中から勝手に這い出るものではありません。1頭のカメが孵化して動き始めると、それが刺激となって次から次へと他の子ガメ達が孵化し始めます。子ガメ達の動きが大きくなると、卵の上にあった砂が少しずつ崩れ始めます。子ガメ達はその中を這い上がり、また天井の砂が崩れるといった流れを繰り返し、地表を目指します。そして、夜から朝方にかけて砂の上に出てくると、一目散に海に向かって進み始めます。しかし、子ガメは

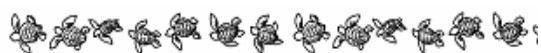


先に孵化した兄弟の足跡を追って海へ急ぐ子ガメ

光に向かって進む性質がありますので、時には海の方ではなく人工の明かりに向かって進んでしまい、海にたどり着けない子ガメも出てきます。また、イヌやネコなどによって食べられてしまう

こともあります。

(末吉豊文)



参考資料；宮崎県教育委員会作成パンフレット

「宮崎県指定天然記念物 アカウミガメ」

日本ウミガメ協議会ホームページ



## 平成 16 年度野生鳥獣生息分布調査について

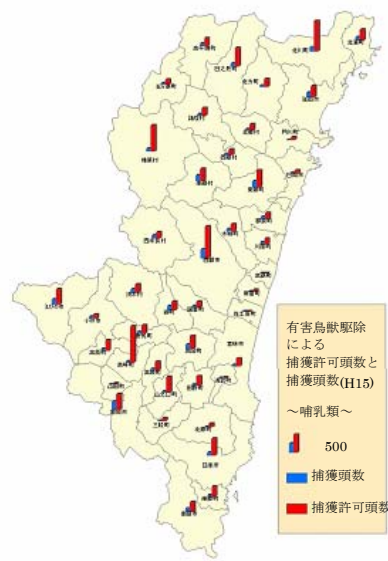
この調査は、野生鳥獣の捕獲・分布状況を調査分析することにより、今後の適正な保護管理計画の基礎資料を得ることを目的として実施しました。

平成 15 年度の狩猟データと、平成 12 年度から 15 年度にかけての有害鳥獣駆除データを整理分析し、またその結果を元に市町村への聞き取りを行い、総合的に生息状況、今後の動向等について考察を行いました。

平成 15 年度の狩猟により、哺乳類 8 種、鳥類 31 種類が捕獲されていました。最も捕獲数の多い哺乳類はイノシシの 6,221 頭、ニホンジカの 4,771 頭、次いでノウサギの 2,918 頭の順でした。捕獲された場所をメッシュ数で表すと、イノシシが 264 メッシュ、ノウサギが 160 メッシュ、ニホンジカが 157 メッシュの順でした。しかし地域の詳細を見ると、イノシシは全県下において、ノウサギは県中部から県南部が主で県北部はまばら、ニホンジカは県北部から県中部にかけてのみでした。

有害鳥獣の状況については、イノシシ、ニホンジカ、ニホンザルの 3 種で県内の被害面積の 73%、被害金額の 74% を占めています。平成 12 年度からの捕獲頭数の推移をみると、イノシシは西都市で、

有害鳥獣捕獲許可頭数と捕獲頭数(哺乳類)



ニホンジカについては東郷町、南郷村などで、ニホンザルについては西都市、高岡町などで大きな増加がみられました。

野生鳥獣の生息数の増減、あるいは分布の拡大縮小はヒトの生活環境の変化と表裏一体であり、

我々ヒトの生活と密接に関係しています。現在県内各地で実施されている有害鳥獣駆除もその影響のあらわれと思われます。その意味では今回の調査結果を基礎資料として、今後も継続的な調査を実施することで、野生鳥獣の生息動向の推移を把握することが必要とされています。(岩切康二)



### アカウミガメ見学会に参加して

宮崎野生動物研究会 賛助会員 本木 宏子

「フーッ、フーッ」大きな鼻息を立てながら、前足で必死に砂をかく。生まれて初めて出会ったアカウミガメは、思っていたよりもずっと大きく、首や腕ががっしりしていて、力強い姿をしていました。ちょうど産卵を終えたところで、少し迷いながらも、重たい体をズズッ、ズズッと引きずって、暗い海へと帰って行きました。

子供の頃から魚釣りや素潜りをして、26年間、宮崎の海を満喫して育ってきた私ですが、野生のアカウミガメに出会ったのは初めてでした。目に涙をいっぱいためて卵を産み落とすお母さんカメの姿を何度もテレビで見たはずなのに、実際、目の前にカメがいると思うと体が震えました。胸をドキドキさせながら、暗闇の中で必死に目を凝らしました。感動で震える。久しぶりの体験でした。

もちろん、感動だけではありません。押さえつけられ、タグを付けられるカメの姿を見ると、こんなに生きるエネルギーに溢れている生き物でさえ、調査・保護されなければならないのかと、正直、ショックを受けました。賛助会員としてこの調査に参加していなければ、ずっと、どこか遠くの出来事であっていただいかもしれません。その現実を知る意味でも良い機会になりました。

カメに出会った思い出を最後に、主人の転勤で宮崎を離れることになりましたが、いつかきっと、また故郷の海でアカウミガメに会いたいと思います。そのために自分ができることを考えてみようと思います。

2005年8月15日



## 北太平洋アカウミガメ国際会議 参加報告

2005年3月2日から5日にかけて、北太平洋アカウミガメワークショップがハワイで開催されました。この会議はアメリカの西太平洋漁業管理協議会(WPRFMC)と国立海洋漁業組合(NMFS)との共同で開催され、太平洋のウミガメの個体数復活活動を今後も継続し促進するために開催されたものです。日本からは、日本ウミガメ協議会亀崎直樹会長をはじめ、松沢慶将、水野康次郎さん、屋久島ウミガメ館から大牟田一美さん、そして宮崎から竹下の5名が招待され、オーストラリア、アメリカ、メキシコ、ハワイなど太平洋を取り巻く多くのウミガメの専門家が集まりました。

初日は、それぞれの地域で行われている活動の紹介講演、2日目はWPRFMCの委員会が開催され、それぞれの報告と答弁があり、3日目はオブザーバーを含めて議論がなされました。

会議では初日に日本ウミガメ協議会の松沢さんが日本の渥美、屋久島、南部のアカウミガメの状況を話し、大牟田さんが屋久島のウミガメの状況、次いで私が宮崎のアカウミガメ産卵地の現況について話しました。続いてバラーズさんは、台湾と日本のコラボレーションで行ったアルゴス追跡調査の



結果報告をし、ポロピナさんは、アメリカ・ジョージア州で行なったアルゴス追跡結果と絡めてウミガメと海流、水温、えさの量などの関係が話されました。また、スイマーさんは、網膜の色の反応の違いを見てそれを利用した混獲しにくい漁法の開発。マヌエルさんは、ペルーにおける漁法の構築、ニコルスさんは、バハカリフォルニアで行った調査の話、ペックハムさんは、バハカリフォルニアにおけるウミガメの混獲の状況、マルドナドさんは、メキシコでの漁業の混獲の状況を説明しました。そして水野さんは、メキシコと日本の小学生の交流、アギラさんは獣医学からみた環境と人と動物のバランスの概念的話をされました。

国際会議に出席させてもらった私は会話が不十分でしたが、世界中の人たちが私たちと同じようにウミガメの研究や保護、それに教育啓発活動などを行っていることに心強さを感じるとともに、宮崎からも若い人たちがもっとウミガメの保護活動を推進し世界に発信出来るようにする必要性を感じました。出席に際しましては、日本ウミガメ協議会亀崎会長をはじめ多くの方々にお世話になりましたことを感謝いたします。(竹下 完)

### 動物こぼれ話 ② ニホンカワネズミ

水に潜るネズミをご存じですか？河川の上流に生息するニホンカワネズミという動物です。モグラ目トガリネズミ科に属するモグラに近い仲間では体長12cmほどの動物です。溪流など水がきれいで水量が多く、餌となる動物が多い所に生息し、水系環境の指標動物となり得る動物です。生息数もそれほど多くなく、生態もまだよく分かっていません。宮崎県版レッドデータブックでは準絶滅危惧種に指定されています。水辺で生活するのに適応し、手や足の指には剛毛が生え水かきの役目をして泳ぐのが上手です。水の中で体毛に着いた気泡が銀色に見えるところから「銀ネズミ」とも呼ばれています。餌は水中でヤマメやタカハヤを捕らえたり、サワガニや水生昆虫を捕って食べます。山間部のヤマメ養殖場などでは、稚魚が孵化する2-3月頃に養殖池に入り込んで稚魚を食べるため嫌われ者です。またヤマメ釣りの人からも嫌われ、銀ネズミが現れるとその日の釣果は期待できないと聞いたことがあります。

カワネズミに出会ったことのある人は溪流釣りをする人などほんの一部に限られていますが、宮崎県では標高200-900mくらいの間で確認されています。目が小さく体はもこもこしたかわいさがあります。臭腺があり独特の臭いがします。以前、カワネズミを車で輸送した際臭いが車内に残ってしまい、かなり長い間悪臭に悩まされたことがあります。飼育すると人馴れしやすく、餌としてタカハヤなどの小魚を与えると手から取って「しゃりしゃり」と音を立てながら食べます。飼育中は四六時中食べさせないといけなかった記憶があります。(中村豊)

- =====
- 4/11 青島のサーファーにウミガメ講演会を開催。皆さんとてもウミガメ保護に関心を持っていただきました。
- 4/15 「わいるどらいふ」編集会議
- 4/21 2005 年度アカウミガメ調査の打ち合わせ会
- 4/28 宮崎県土木課による宮崎海岸赤江地区（松崎海岸）の災害復旧工事についての意見交換会。工法の説明でしたが突然の発表で出来るだけ人工構造物は避けるように要請しました。
- 5/15 環境大臣賞受賞。高千穂町で 2005 年 5 月 14 日～15 日に開催された「全国野鳥保護の集い」で、宮崎野生動物研究会は環境大臣賞を受賞しました。会員の皆さんの永年にわたるアカウミガメ保護活動に対する表彰でした。
- 6/12 MRT ラジオ番組「菌田潤子のサンデーラジオ大学」に竹下会長が出演。「ウミガメとの出逢い」との演題で宮崎でのウミガメ保護の歴史と現在を語りました。
- 6/18, 6/20 賛助会員のウミガメ産卵観察会。2 時間ほど海岸を歩き、やっと産卵するカメに出くわし、初めて見るウミガメの産卵に、大人も子どもも皆さん感動されました。
- 6/24 NPO 法人宮崎野生動物研究会 2005 年総会
- 7/30, 8/6 賛助会員のウミガメ産卵観察会
- 7/31 「わいるどらいふ」編集会議
- 8/5 子ガメの孵化見学会。賛助会員の皆さんと一緒に子ガメの孵化を見学しました。50 名ほどが参加し、元気に泳いでいく子ガメたちに「大きくなって戻っておいで」と声をかけていました。
- 8/25 日向ウミガメ研究会（大野会長）による「ウミガメでどんな動物」という講演会で竹下会長が講演
- 8/27 宮崎グリーンヘルパーの会の皆さんによる住吉海岸の清掃。子ガメの通路の掃除をし、ごみなどを拾い集めたらトラック 1 台分がありました。皆さん海岸をきれいにしましょう。

2005 年度アカウミガメ上陸調査報告会

主催：宮崎野生動物研究会  
日時：2005 年 10 月 10 日(月) 13:30～15:30  
会場：宮崎県総合博物館 研修室 1  
内容：本年度の調査結果を報告します

第 16 回ウミガメ会議

主催：日本ウミガメ協議会  
期間：2005 年 11 月 18 日（金）～20 日（日）  
場所：沖縄県竹富町黒島 小中学校体育館  
参加費：一般 3,500 円、学生 1,500 円  
（当日申込）一般 4,000 円、学生 2,000 円  
懇親会費：5,000 円  
申込みなどの詳細は、日本ウミガメ協議会にお問い合わせください。Tel: 072-864-0335

投稿を募集しています！

『わいるどらいふ』に原稿を投稿してみませんか。思いがけずに動物に出会った体験記など何でもかまいません。楽しい原稿をお待ちしています！

会員募集

正会員 入会金 5000 円 年会費 2000 円  
賛助会員 入会金なし個人 1000 円 団体一口 5000 円  
申し込み方法：官製はがきに郵便番号、住所、お名前をご記入の上、下記竹下宛にご投函ください  
会費振込み口座：郵便局 01750-0130838  
特定非営利活動法人 宮崎野生動物研究会

~~~~~ 新会員のご紹介 ~~~~~

<正会員> 足立辰雄、亀崎直樹、瀬堀真紀、中武由紀  
<賛助会員(個人)> 安楽むつ子、石橋 睦、緒方真帆子、甲斐春子、菊野健一郎、蔵屋和子、黒木キヨ子、佐藤ヒデ子、清水茂子、志村信子、瀬尾勝敏、田崎恵子、田辺雄一、田村方子、原 靖枝、藤原なるみ、三浦廣子、水野康次郎、本木宏子、山根順子、頼 節子  
<賛助会員(団体)> 株式会社エコー、ボーイスカウト宮崎 15 団、環境共育を考える会

宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.2 2005 年 10 月 1 日発行



特定非営利活動法人  
**宮崎野生動物研究会** 代表 竹下 完

880-0825 東大宮三丁目 9-11  
Tel 0985-25-7585 Fax 0985-25-7585  
Email: kan-take@miyazaki-catv.ne.jp  
http://www.m-yaseiken.org